

「研究ノート」

河川が育てた文化

近代文学者嵯峨の屋お室の生涯と作品について

中村正己

はじめに



嵯峨の屋お室
『日本文学全集 名作集一』集英社より転載

利根川流域の近代文学者には、故郷の鬼怒川べりの農民の生活を描いた唯一の長編小説「土」によつて農民文学を確立した長塚節（一八七九—一九一五）と、写生的小説として「野菊の墓」を書き下ろした伊藤左千夫（一八六四—一九一三）がある。

両者の作品が代表作として知られる以前に、二葉亭四迷の影響を受けてロシア文学を学び、坪内逍遙の大きな助勢を得て浪漫主義文学を著した人が、矢崎嵯峨の屋である。

今号は、関宿藩の近代文学者嵯峨の屋お室の生涯と作品について紹介をこころみた。

一 嵯峨の屋お室の生涯について

嵯峨の屋お室の本名は、矢崎鎮四郎である。文久二年（一八六二）一月十二日下総国関宿藩主久世広文の江戸詰勤番、矢崎鉦八郎勝則の次男として、江戸日本橋箱崎新堀関宿上屋敷において生まれる。矢崎家は、藩主久世広文の時に扶持高一〇〇石で佐助が元締として召出される。続いて左大夫が大納戸、源助は御広間の役職にあった。後に家督は嘉充・嘉則・嘉衛と続く、嘉衛は父嘉則を残して先立って没する。

嘉衛の没後、同藩士浅野唯蔵の三男鉦八郎が矢崎家に婿養子に迎えられ家督を継ぐ、鎮四郎の母親（慶）は始め、嘉衛と縁組、後に嘉衛が没したことにより鉦八郎と婚姻する。文久二年五月、藩命により鎮四郎の家族は関宿下屋敷に移る。慶應四年（一八六四）五月関宿藩の佐幕派を脱藩し、上野彰義隊（正隊）に加わる。関宿よりの脱走者名によると矢崎隼之助（又は、進之助）の名が見える（『関宿町史研究第二号』『下総境の生活史史料編 近世II 村の生活』）。

敗走の後、入牢の身となり、家族は、家財没収となる。鎮四郎は祖母の実家や母親の実家に寄留する。

明治二年（一八六九）父は、出牢し自宅謹慎を命じられる。翌年の五月、父は謹慎の身許され、家族と共に上京し四谷坂町（現新宿区）に荒物店を開く。鎮四郎は、父の友人であった田端円勝寺住職の世話になり、隣寺の仲台寺に預けられ、後に小石川一行院に移る。同四年（一八七一）家族のもとに戻り、「刀鞘師」及び「煙草屋」に一年間奉公勤め。同五年四月、四谷仲町小学校に入学。翌年には芝の愛宕下町に転居し、同時代の小説家、詩人、劇作家でもあった山田美妙（一八六八—一九一〇）在学する桜川小学校に転校する。明治八年（一八七五）府県長官によって地方行政上の諸問題を討議おこなう地方官会議の雇給仕となり、版籍奉還の指導者木戸孝充議長より慰撫激励されたとも伝えられている。

明治九年（一八七六）九月、東京外国語学校露語科（部）給費第一回生入学。この年に父鉦八郎没する。同十六年、外国学校露語科（部）卒業と同時に統計院に就職する。ところでロシア語を共に学んだ二葉亭四迷は、鎮四郎が卒業する二年前に同学校に入学されている。明治十八年（一八八五）統計院は、官制改革によって廃止され鎮四郎は休職となる。翌年、二葉亭四迷の勧めで、明治の文豪坪内逍遙（一八五九—一九三五）を訪ねて、本格的に創作活動をはじめめる。

最初の作品「神経の罪」は、逍遙の加筆校正を得て「今日新聞」に発表（未見）。続いて、逍遙の別号「春廼屋主人」のもとに「浮世人情守銭奴之肚」を大倉孫兵衛書店より刊行。そして逍遙の二つ目の筆名「春の屋おぼろ」に似通った「嵯峨屋お室」の筆名を鎮四郎に与えた。そして「嵯峨の屋お室」が浪漫主義文学に隆盛を極めた時期は、二十八歳から五十歳頃迄であり、次の様な小説・評論を刊行し、文壇に連載発表している。「無味記」（春の屋おぼろ校正）「駸々堂から刊行。「薄命のすず子」をやまと錦に連載。「初恋」

田美妙等の共著短編集「小説花籠」に収載刊行。金港堂から「野末の菊」他四編を収載した「千草」刊行。評論「小説家の責任」「方内齋主人に答ふ」をしがらみ草紙に発表。更に北邨散士筆名で小説「流転」並びに評論「平等論」「宇宙主義」を徳富蘇峰（一八六三—一九五七）主宰の総合評論誌「国民の友」に発表。半自伝「我家」を文芸倶楽部に執筆し、他にも口詩・翻訳等多数の作品を著わしている。

この間、金港堂並びに国民新聞社の客員をはじめとし、国民新聞社退社後は、露国海沿漁業調査通訳官を経て、一時郷里の閑宿に滞在中、茨城県猿島郡境町の小林亀五郎長女「とせ」と婚姻する。婚姻後は、日露戦役大本営幕僚事務取扱、海軍省軍司令部に奉職する。また、ロシア語の教官としても教鞭をとっている。

明治四十三年（一九一〇）新小説に「妻の親切」を発表し、創作活動は衰退期を迎える。晩年は、読売新聞に「逍遙博士と篁村氏と二葉亭四迷」を執筆すると同時に陸軍士官学校教授の職を退官。後に東京渋谷代々木に転居し、古書店「十邑堂書店」を開業。

古書店経営を営む傍ら、「嵯峨の屋お室」の近代文学の集大成として昭和三年（一九二八）に「現代日本文学全集第十編」（改造社発行）並びに同五年「明治大正文学全集第四卷」（春陽堂発行）に「初恋」「流転」など代表作と「自筆年譜」を「嵯峨屋お室集」・「矢崎嵯峨の舎」として収められた。同六年に妻（とせ）他界する。同二十二年（一九四七）千葉県市原郡牛久町牛久に於、八十五歳の生涯を閉じる。菩提所は、東京都豊島区雑司ヶ谷墓地に「矢崎家」墓石が建っている。

二 嵯峨の屋お室の業績について

主な文学作品の概要

「無味気」

本書の主人公は、関翁山。彼は元王子村の貧農の家に生まれたが、幼くして父母と死別。亡父の遺言に従って、九歳の時臨済宗の円通寺の小僧となり。経文、儒学を学ぶ。老僧の親友で洋学者の泉護の魅力に惹かれた翁山は、僧籍を離れ、泉が開いている東京四大塾の一つ共有館に入門。英学を学ぶうち泉家の令嬢静子に熱い思いを寄せるが、彼女は十七歳で不帰の客となる。

塾での学問を終了した翁山は、大学で政治経済を専攻。やがて師の泉は病に倒れ、温泉療法のため家を留守にする。その間虫干し作業をした翁山は、泉の原稿、書簡を読んで、思いがけなく思想的に過敏な、極めて危険な泉の一面を知り、泉に意見を申し述べる。結果は逆に師の怒りに触れ、師の家を追われる。折しも翁山は駐米公使の書記官となり渡米する。

そしてアメリカの女性と恋愛、失恋の憂き目にあい、病のため帰国する。先ず師の泉家を訪問するが夫妻は既に世に無く、残るは墓石のみで、かつて薫陶の恩恵に浴した秀才達が、師の恩に報いることもない現状を知り嘆く場面でこの作品は了する。

この書で特筆すべきことは、文中の「泉護」は矢崎嵯峨の屋の師尺振八（一八二九—一八八六）をモデルとして筆を執っている。尺振八は、明治初期の英学者で明治三年（一八七〇）東京本所に私塾共立学舎を開いて英学を教授した。矢崎嵯峨の屋はロシア語を学んだ他にも尺振八から英学を学び著作物の翻訳に取り組んだことが窺い知る。

「薄命のすず子」

皆川鈴子の一家は、漢学者の父の死後零落し、鈴子は病床にある。そこに父の弟子、松本三郎が訪れる。彼はオックスフォード大学を卒業。誠実、社会を思う理想主義者で帰国してからは青年政治家として活躍中である。悲惨な恩師の遺族の現状を目にして、早速鈴子を入院させ、鈴子は病を癒すことができた。三郎の尽力で、玉振館の女教師となる。三郎と鈴子の相愛の間柄を裂こうと鈴子の同僚で、三郎の友人山口剛は、鈴子に求婚を迫る。

彼は、才知、学問は優れているが道徳観念は無い男である。そのため鈴子は、恩人である三郎の求婚を拒む結果となるが、後に山口の策謀であつたことを知り、鈴子は三郎のもとに戻ろうとするが、時すでに遅く、三郎は従妹と結婚。悲しみの果てに耶蘇新教（キリスト教）の信者となり終わる。

主人公の性質は、頗る慧敏で且つ質朴で見識があつて西洋の思想をもつた日本の近代開化期のタイプの女性として登場させている浪漫主義的な作である。

「初恋」

本作品は、作者がロシア文学で学んだツルゲーネフの「初めての恋」を素材にして浪漫的に貫かれている、一老爺の五十年前の回想の中で物語が展開していく。

時は幕末期。主人公は姉がいる武家の子供で、年齢が十四歳の少年、或る日少年の家に、江戸から清水の叔父と共に従姉が来訪する。母が誉めていた通り「背はすらりと高く、色はくつきりと白く、目はぱつちりと清く」誠に美しい娘お雪は、少年の家に暫く逗留することになった。その間、娘に慕情を抱き、恋心に変わる少年の心理が描き出されている。

そして刀根川の川辺で舟に乗って帰る叔父とお雪を見送る場面で

物語は終わる。後日、江戸に帰ってお雪は結婚。産後のひだちが悪く十九歳で他界する。別れの際に約束した再会の望みもすべて絶たれる。

作者は読者に向かって、青春は夏の夜の夢の如く過ぎて迎えた花が飛び落ち葉の思いを語る。

なかでも、作者が少年期を過ごした郷里の城下町を離れ、娘の帰京に先だつて土産にと関宿対岸の境町長井戸村の森の中に「蕨」採りに入る場面。また、刀根川堤でみたレンゲソウや蝶などの田園風景が随所に取り入れられリアルに構成されている。

「つれづれさま」

女主人公松村文子は、熱心な耶蘇教信者で女学校の教師。そして勤務校の創立者の息子宮川と深い関係にある。その文子が京橋の辺で鉄道馬車に乗り合わせた宮川の親類、少年「晋」の後を追ひ、巧みな言語で誘惑し、果ては性的関係を結んでしまう。或る夜半に酔漢となった宮川が、文子の家を訪ねるが、そこには文子と晋の同寢床の現場であつた。逆上した宮川が身近にあつた「鶏卵」を、晋の顔に投げつける。潰れた卵は腐つていたのかあたり一面に異臭を放つた。三人の関係は終局を迎え、ストーリーは終わりになる。

本作品は、「キリスト教」の熱心な信者を裏付ける描写は見あたらず、むしろキリスト教の偽善性を批判する作品として書評されているが、道徳的社会批判ばかりでなく作者が厭世観を抱き、それを著わしたものと考えられる。

「野末の菊」

主人公は森匡。父は地主で県議員。森匡には、お糸という幼馴染の少女がいる。お糸は乳母の娘で学業成績は抜群、学問への情熱を持っている。その念願を知った匡は、東京の農科大学に遊学中の

自分の学費を削つて、お糸を援助し、東京の女学校に入学させた。相愛の二人は卒業を機に結婚の意思を固める。

だがお糸が貧農の娘という身分的差別観から匡の父は猛反対する。勘当の身となつた匡は、東京にお糸と新居を構えるが、幸は続かなかつた。匡は家族との不和に耐えきれず、苦悩から逃れようとして、祖母から贈られた一万円を、殆ど博奕で失ひ、遂には自殺する。悲嘆にくれたお糸は、最愛の亡夫の面影を抱いて、教師として世にたつ決意をする。このように若い男女の恋愛が主軸の作品である。

「流転」

この小説の主な登場人物は三人である。東京より二里程離れた北豊島村（現在の板橋・北・豊島区一帯）の畑野家が舞台で書かれている。秀才の士、畑野頼方は両親を早く亡くし、祖父の死後資産を承継し若い当主となつた。頼方には「天性憐憫の心」の深い深い十八歳の妹お露がいる。頼方の家は、故郷で農業や牧場経営をおこない精神の安住の地である。

そこに彼の友人林が訪れ、逗留することになる。林は頼方とは対照的に、幸福な家に生まれたが、少年の頃に父母と死別。その後は不幸な境遇にあつて厭世的な性格の持ち主となる。国学を学び詩人になり、知徳円満な人になるように心に誓っていた。

お露は精神的苦悩を負う林を案じ、次第に慕情を抱き、恋愛に変つていく。林は、その愛に応えることなく突如畑野家を立ち去る。以上のような作品である。

おわりに

嵯峨の屋お室について、筆者がはじめて知ることが出来たのは、

奥原謹爾著「閑宿志」・「日本文学全集名作集明治編」（集英社発行）
「日本現代文学全集現代名作選（一）」（講談社発行）以上三冊の郷
土史や文学書である。更に、嵯峨の屋の妻が茨城県境町の生まれで
あることから尚一層関心をいだいたものである。
本稿を書くにあたり、矢崎家の現当主矢崎正夫様（八王子市南陽
台）には、「明治文学全集二葉亭四迷と嵯峨の屋お室集」のうち嵯
峨の屋お室に関する文学作品資料を心よく提供下されましたこと
について深く感謝申し上げます。

〔引用・参考文献〕

- ・昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書第六十二巻』
（昭和女子大学近代文学研究所 平成元年六月五日発行）
- ・坪内逍遙・二葉亭四迷『日本文学全集坪内逍遙・二葉亭四迷集』
（集英社 昭和四十四年十二月二十五日発行）
- ・山田美妙・他『日本文学全集八十六巻名作集（一）明治編』（集
英社 昭和五十六年八月二十五日発行）
- ・国史大辞典編さん委員会編『国史大辞典』（吉川弘文館 平成八
年四月一日発行）

（なかむら・まさみ 当館客員研究員）

矢崎嵯峨の屋お室年譜

西暦	年号	事蹟	年齢
一八六三	文久三	一・一二 下総国関宿久世広文の家臣矢崎鉦八郎勝則の次男として江戸日本橋箱崎新堀（現中央区日本橋）久世家上屋敷で誕生。 五・藩命により、鎮四郎・母（けい、慶）・義兄（常三郎）・姉（かね）・祖母と共に江戸を去り、関宿下屋敷に移る。	1
一八六五	慶應元	八・妹（よし）誕生。 一・妹（みね）誕生。	3
一八六八	慶應四	五・関宿藩の佐幕派を脱藩。上野彰義隊に加わる。父（鉦八郎）正隊に加盟する。家財没収、入牢し祖母や母の実家に預けられる。 九・明治元年改元	8
一八六九	明治二	父、出牢し自宅謹慎を命ぜられる。	9
一八七〇	明治三	五・父、謹慎の身許され、家族と共に上京、四谷坂町（現新宿区）に荒物店開く。 一一・鎮四郎は、父の友人である円勝寺（北区田端）住職の世話で隣寺仲台寺に預けられる。	10
一八七二	明治四	一・鎮四郎、小石川（文京区）の一行院に移る。 五・「刀鞘師」へ奉公に出る。 秋・「煙草屋」へ奉公に出る。	11
一八七二	明治五	四・四谷仲町小学校入学。 妹（ろく）誕生。	12

一八七三	明治六	港区芝愛宕下町に転居し、桜川小学校に転校する。 小説家・詩人・劇作家の山田美妙（一八六八—一九一〇）も同学校に在学する。	13
一八七五	明治八	七・父、病死する。享年三八歳。 地方官会議の雇給仕となる。	15
一八七六	明治九	九・異父兄（常三郎）病没。享年一八歳。 東京外国語学校露語科給費第一回生入学。	16
一八八一	明治一四	九・祖母、他界する。	21
一八八二	明治一五	叔父（章七郎）没する。	22
一八八三	明治一六	東京外国語学校露語科卒業。 一〇・統計院就職。	23
一八八五	明治一八	一一・官制改革によつて統計院廃止され、休職となる。	25
一八八六	明治一九	五・小説家二葉亭四迷（一八六四—一九〇九）の勧めで、評論家・小説家坪内逍遙（一八五九—一九三五）宅を訪問。 九・坪内逍遙の加筆校正を得て、「神経の罪」を今日新聞に発表。	26
一八八七	明治二〇	一・春の屋主人のもとに「浮世人情守銭奴之肚」を大倉孫兵衛書店より刊行。 この時、坪内逍遙より「嵯峨屋のお室」の筆名が与えられた。 一一・逍遙の許を去り、神田裏神保町の自宅に戻る。	27
一八八八	明治二二	四・「無味気」（逍遙校正）駸々堂から刊行。 一一・「薄命のすず子」をやまと錦に連載始る。	28

西暦	年号	事蹟	年齢
一八八九	明治二二	金港堂の客員となる。 一、「初恋」「くされたまご」「野末の菊」を都の花に連載発表。 山田美妙等の共著短編集「小説花籠」に「初恋」を収載刊行。 三、「薄命のすず子」連載終わる。 八、一〇、北邸散士の筆名で小説「流転」・評論「平等論」「宇宙主義」を徳富蘇峰（二八六二—一九五七）主宰の総合評論誌「国民の友」に発表。 一一、金港堂から国民新聞社に転職する。「小説家の責任」「方内齋主人に答ふ」をしがらみ草紙に発表。	29
一八九一	明治二四	一〇、金港堂から「野末の菊」他四編を収載した「千草」刊行。 露国沿海漁業調査通訳官となる。	31
一八九六	明治二九	一一、国民新聞社退社。	36
一八九八	明治三一	故郷の関宿に滞在する。	38
一九〇四	明治三七	一、茨城県猿島郡境町一五五四番地—小林亀五郎の長女「とせ」と婚姻。 二、日露戦役大本営幕僚事務取扱となる。	44
一九〇五	明治三八	一、海軍省軍令部に奉職する。	45
一九〇六	明治三九	一、ロシア語教官として陸軍士官学校就任。 三、長男（善吾）誕生。	46

一九〇七	明治四〇	一〇、長女（ナヲ）誕生。	47
一九〇九	明治四二	一一、母（けい）没。享年七十二歳。	48
一九一〇	明治四三	三、「妻の親切」新小説に発表、以後創作活動止まる。	49
一九一二	明治四五	四、次女（りゑ）誕生。	50
一九一五	大正四	一一、三男（賛平）誕生。	53
一九二一	大正一〇	一一、四男（末夫）誕生。 大正四年から同一〇年の間、「逍遙博士と篁村氏と二葉亭」を読売新聞に執筆。	59
一九二三	大正一二	九、陸軍士官学校教授の職を退官する。 豊多摩郡大久保町（現新宿区）から同郡代々幡町代々木（現渋谷区）に転居。 古書店「十邑堂書店」開店する。	61
一九二八	昭和三	一〇、「現代日本文学全集第十編」（改造社発行）に自筆年譜と「嵯峨の屋御室集」収載。	66
一九三〇	昭和五	二、「明治大正文学全集第四卷」（春陽堂発行）に「初恋」「流転」などの矢崎嵯峨の舎編」が収められた。	68
一九三一	昭和六	五、妻（とせ子）病没。享年五二歳。	69
一九三九	昭和一二	七、三男（賛平）没	77
一九四四	昭和一九	五、千葉県長生郡茂原町より同県市原郡牛久町牛久に転居。 七、毎日新聞記者の次男（良平）、南方諸島方面で戦死。	82
一九四七	昭和二二	一〇、八五歳の生涯を閉じる。	85

矢崎嵯峨の屋お室略系

